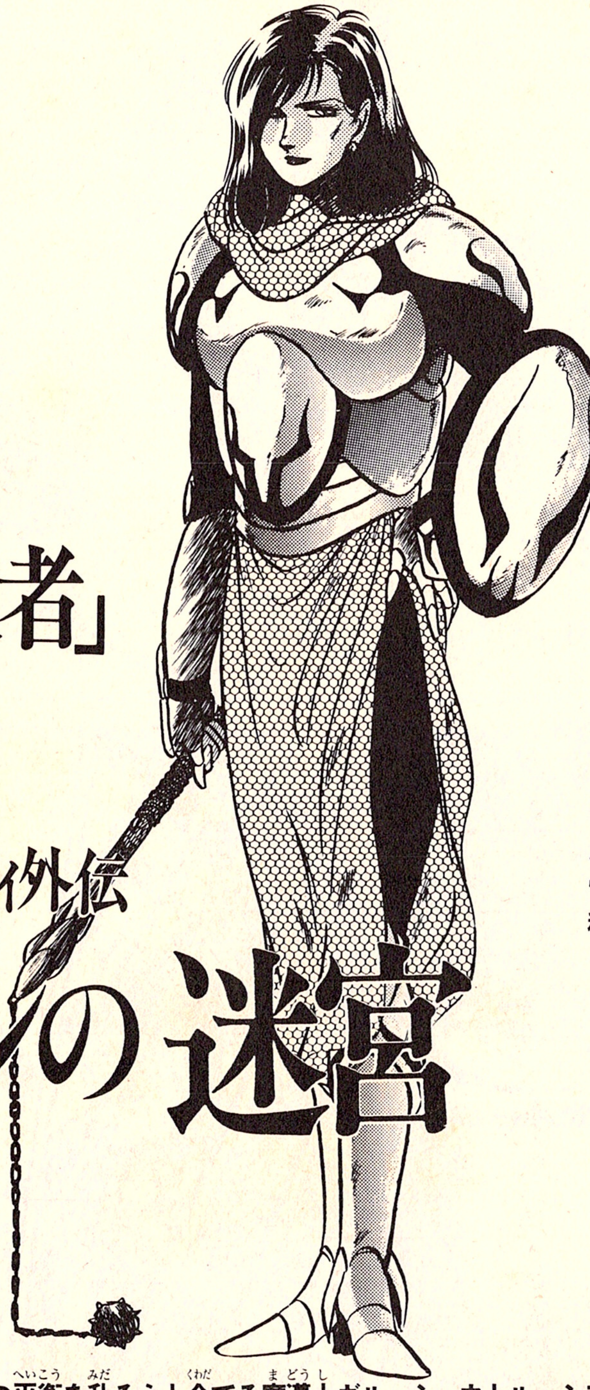
Wizardry®



第5話「背教者」

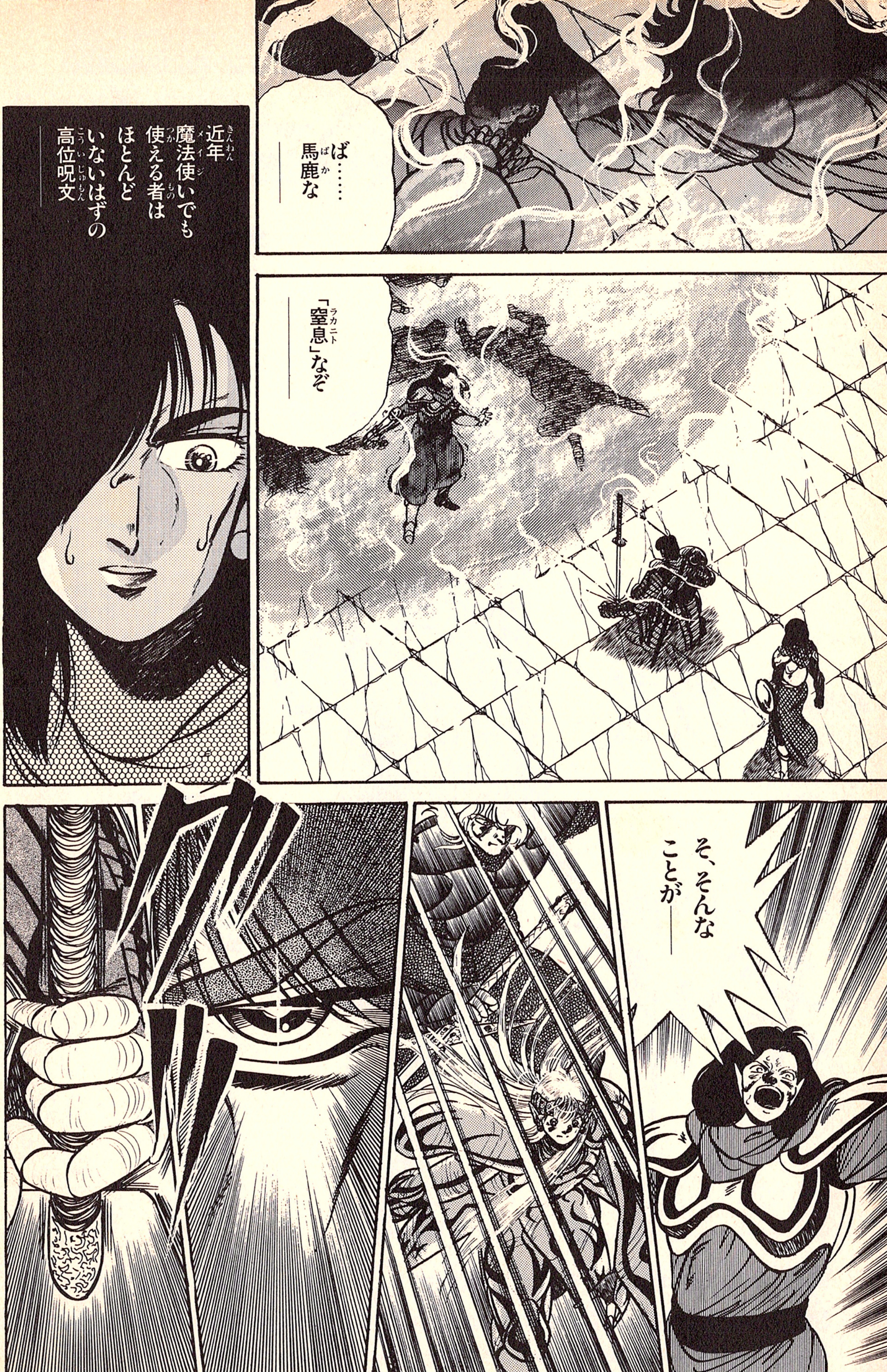
ウィザードリィ外伝

ギルの迷宮

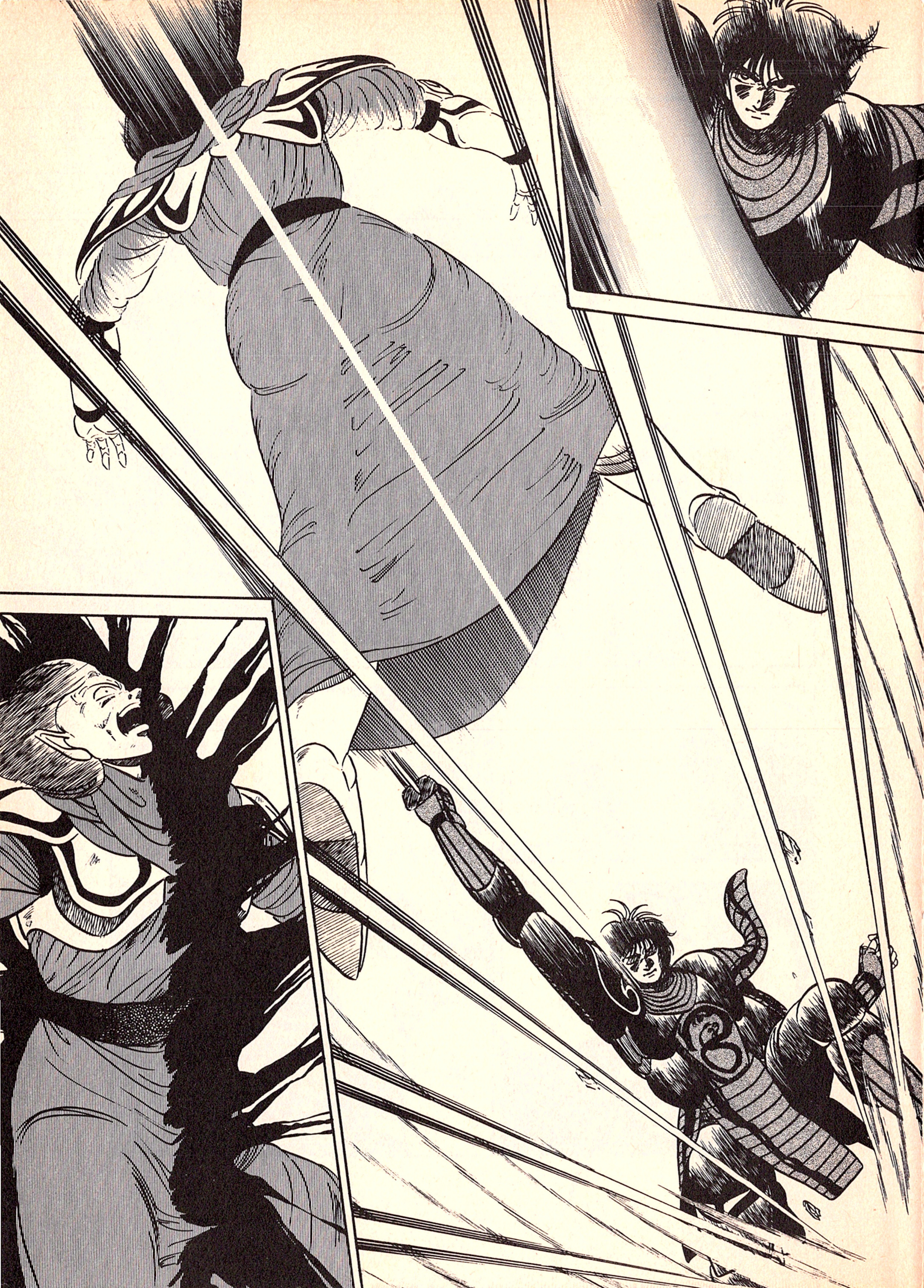
シェーラ

性別：女
職業：ビショップ
属性：悪
性格：着実
種族：人間とエルフ族のクォーター

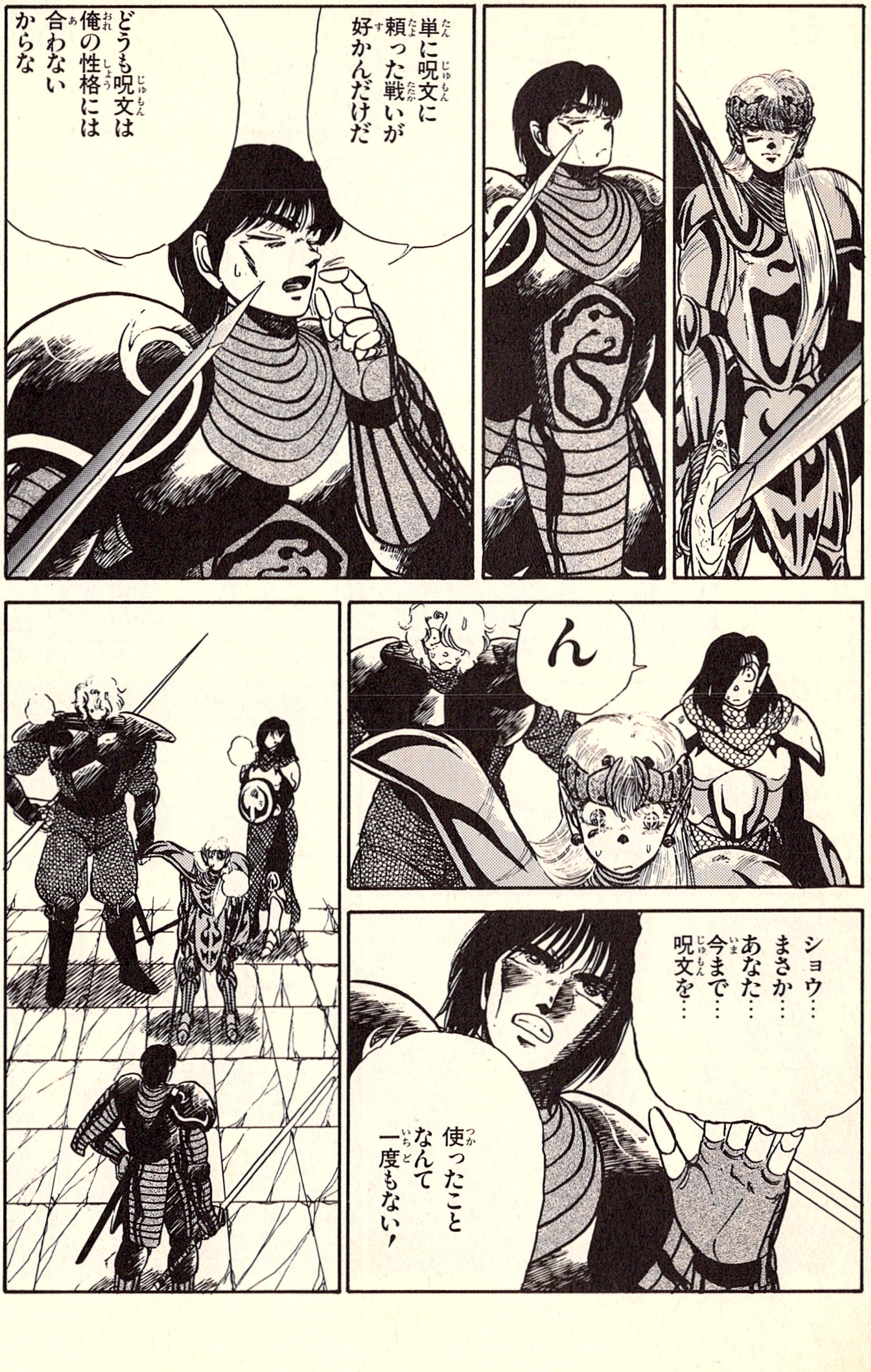
邪法を用いこの世界の平衡を乱そうと企てる魔導士ギル。ショウとルーシディティはギルを斃すために、迷宮へ召喚される。そこで出会った忍者のサンザ、ビショップのシェーラとともに襲いかかる怪物の群れとの死闘はつづいた。そして突入した2階で待ちかまえる邪教徒、シェーラの過去の秘密とは!?

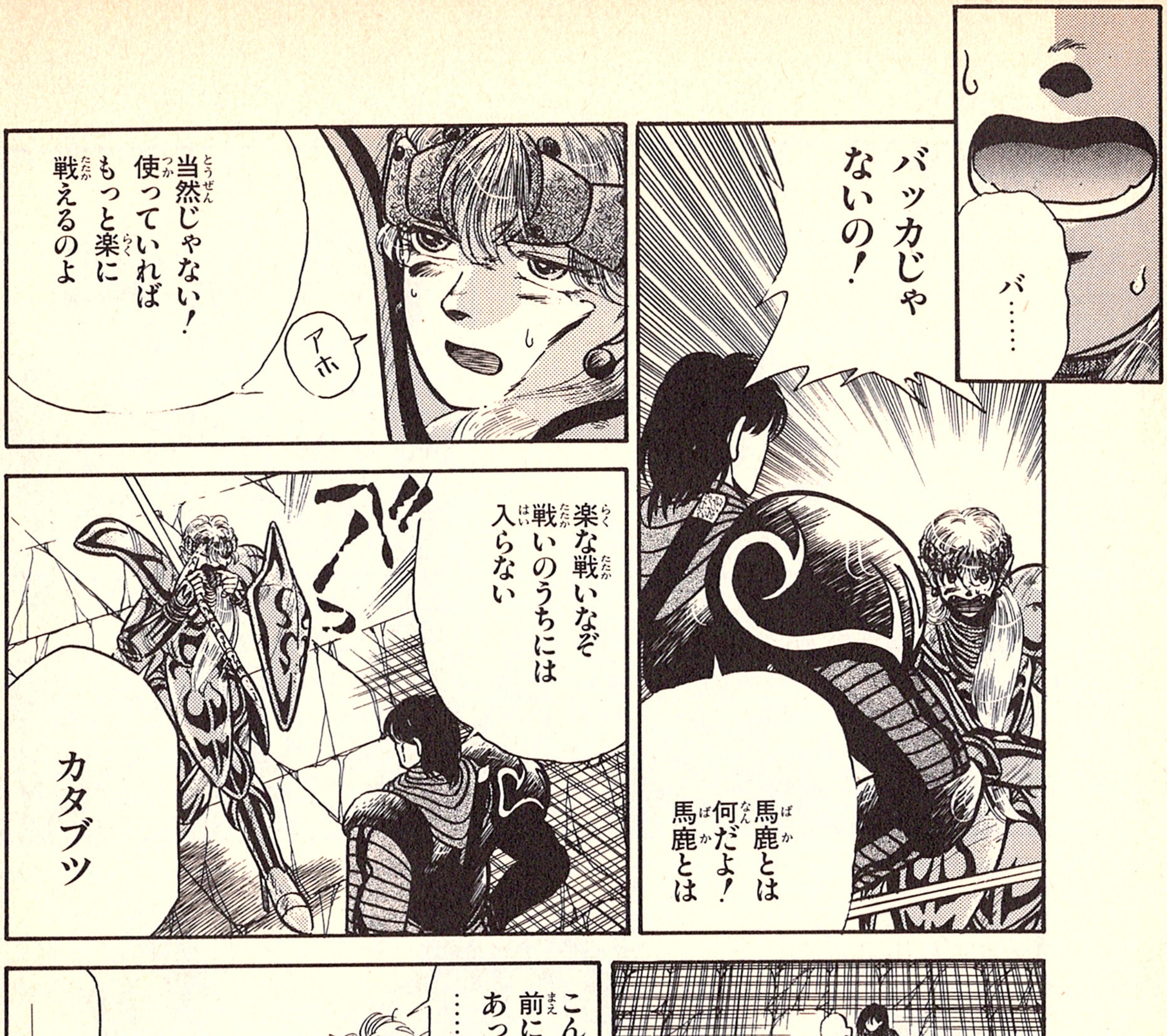


ば……
馬鹿な
「窒息」なぞ
近年
魔法使いでも
使える者は
ほとんど
いないはずの
高位呪文
そ、そんな
ことが——

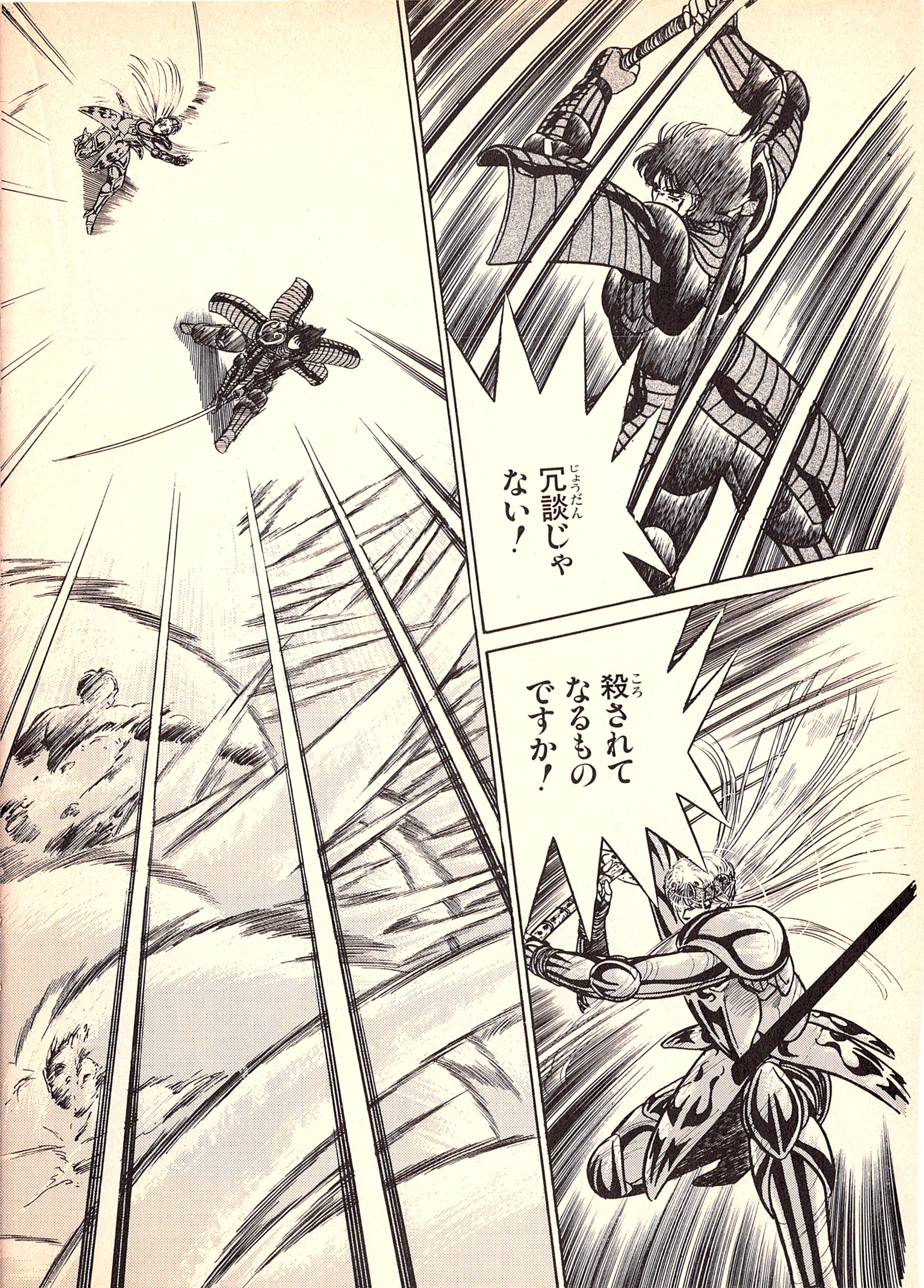



ショウ——
何だ?姫将軍
何故私と戦ってる時今の呪文を使わなかった?
手を抜いていたと云うのか
別に
ではどうしてだ


単に呪文に頼った戦いが好かんだけだ
どうも呪文は俺の性格には合わないからな
ん
ショウ…まさか…あなた…今まで…呪文を…
使ったことなんて一度もない!

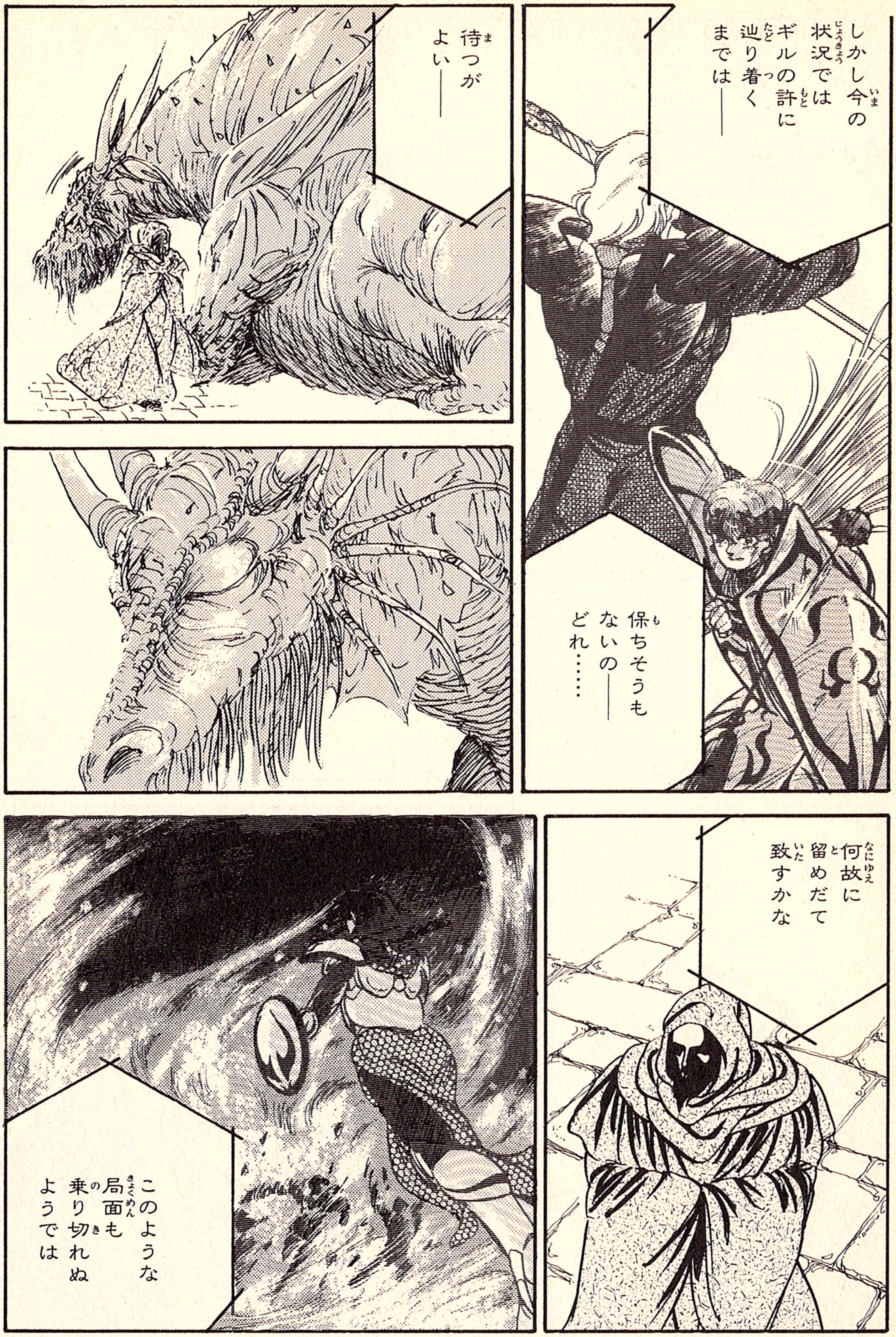

バ……
バッカじゃないの！
当然じゃない！使っていればもっと楽に戦えるのよ
アホ
馬鹿とは何だよ！馬鹿とは
楽な戦いなぞ戦いのうちには入らない
カタブツ
こんな場面前にもあったな……
―


ゾロ
ゾロ
ゾロ
お二人さん
分かってる
高位呪文を操る侍といえども呪文さえ封じてしまえば
戦士と大差ない
畏れるな! かかれ! 殺せ!!
殺せ!

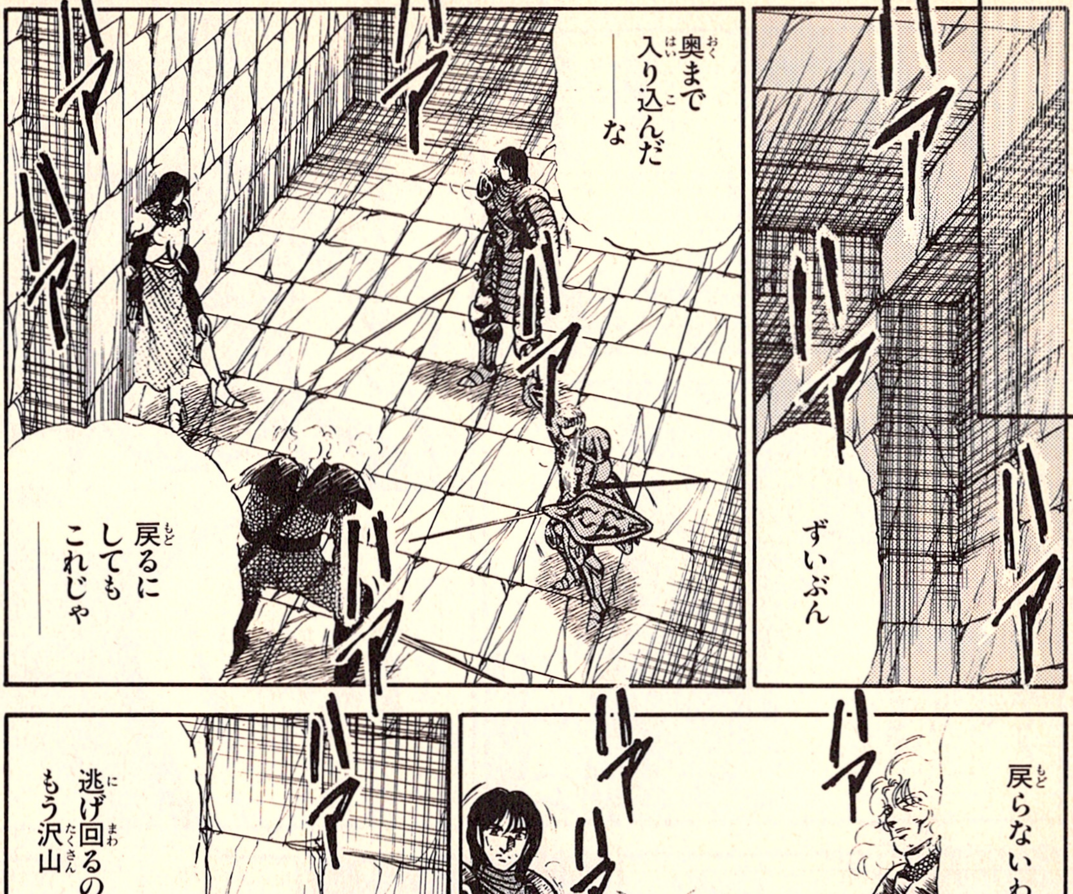

冗談じゃない!
殺されてなるものですか!

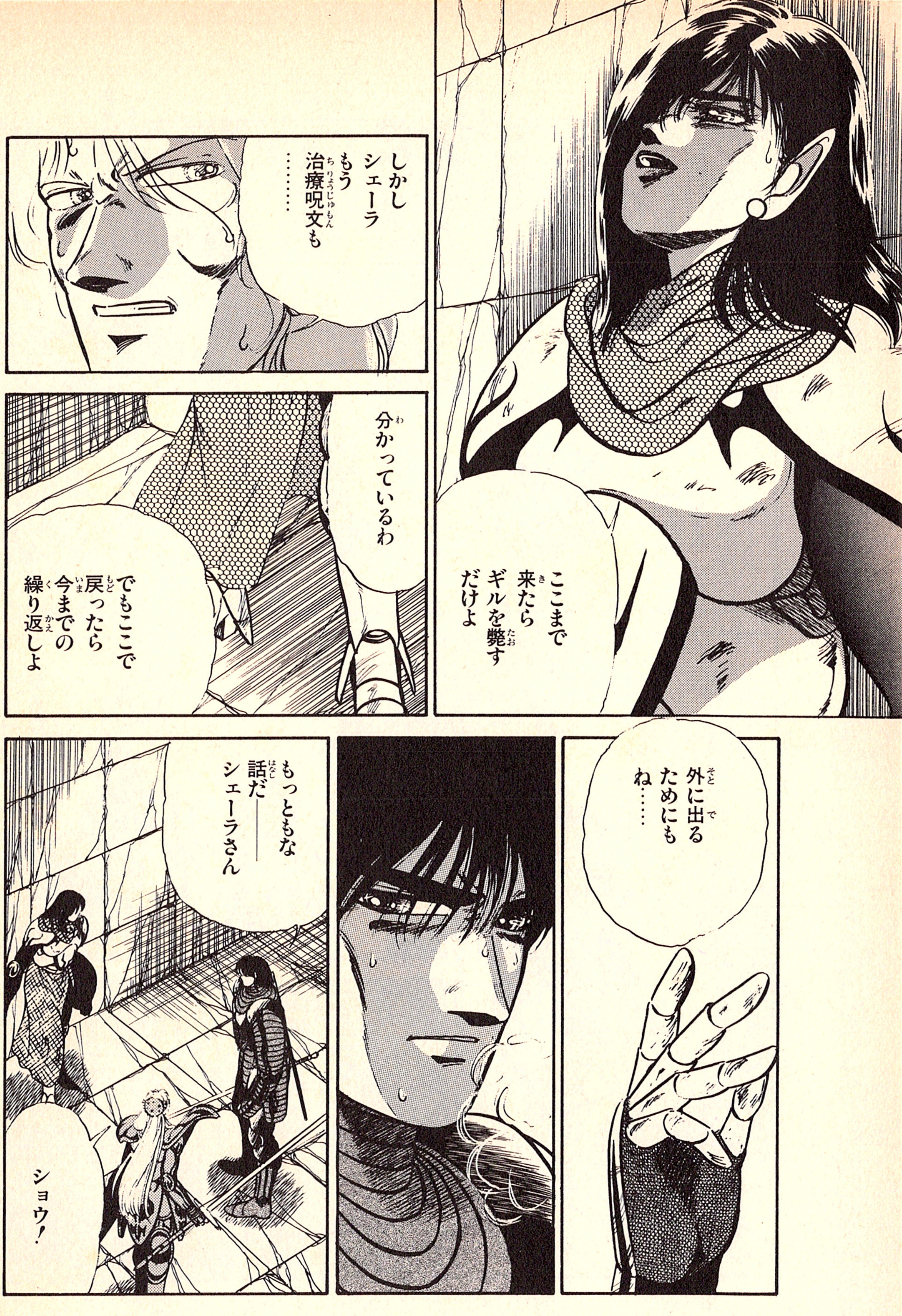



あの若さで「窒息」を唱えられるとはの——
「異形のもの」「古きもの」など封印して以来
人の能力も衰退の一途を辿っていたが
逸材じゃの
確かに……


しかし今の状況ではギルの許に辿り着くまでは――
保ちそうもないの――どれ……
待つがよい――
何故に留めだて致すかな
このような局面も乗り切れぬようでは

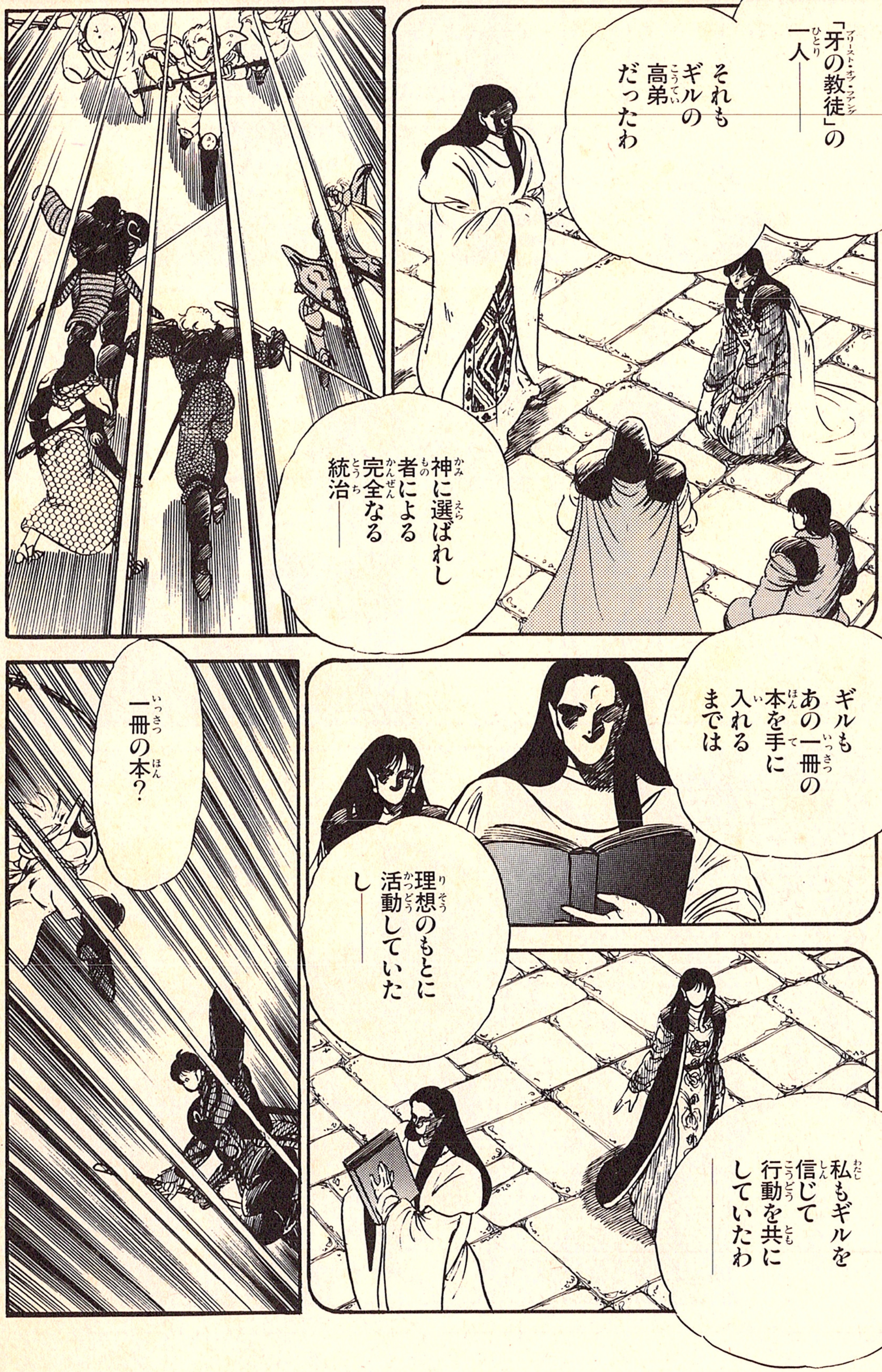

「守るべき者」の資格はない
なり得ぬのではないのかな――
従って汝が望む新たなる種の萌芽にも
ふむ……そうじゃの
止むを得ぬか
まあ……いざとなれば


ハァ
ハァ
ずいぶん
奥まで入り込んだ——な
ハァ
ハァ
戻るにしてもこれじゃ——
ハァ
ハァ
戻らないわ
ハァ
ハァ
逃げ回るのはもう沢山
ハァ
ハァ



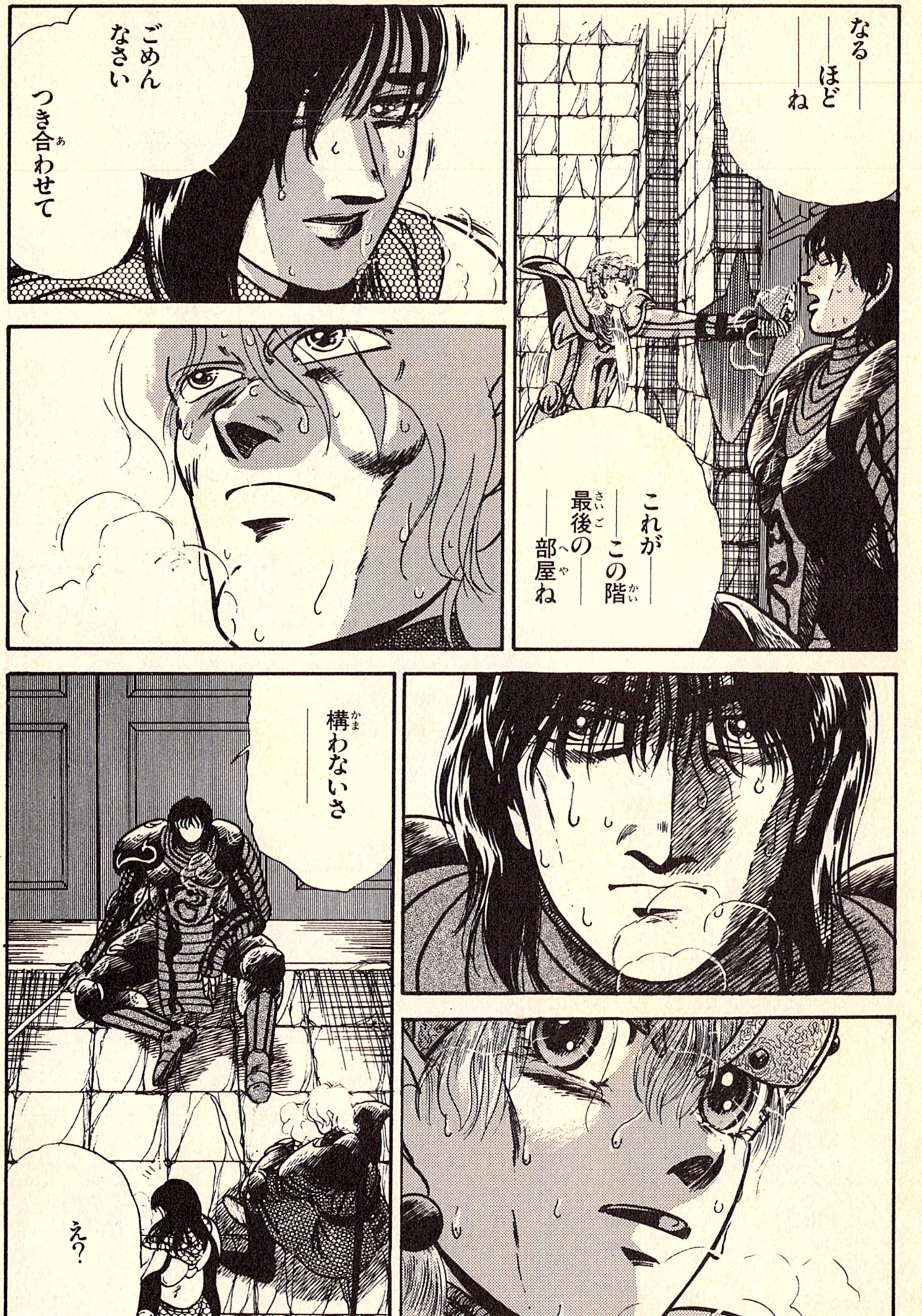
ここまで来たらギルを斃すだけよ
しかしシェーラもう治療呪文も……
分かっているわ
でもここで戻ったら今までの繰り返しよ
外に出るためにもね……
もっともな話だ――シェーラさん
ショウ!

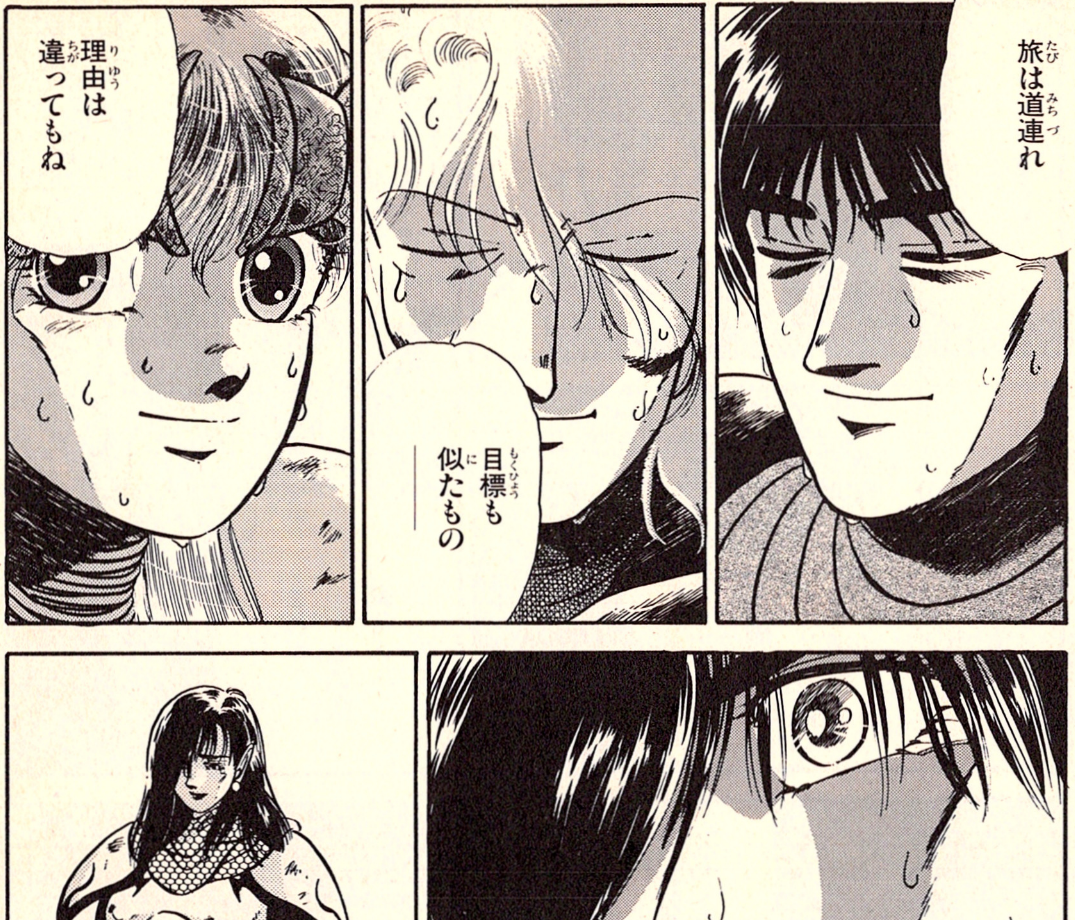

俺やルーとは少し理由が違うみたいだけどな……
いいのよサンザ
よかったら聞かせてもらえないかな?
止さないかショウ
あなたはもう知っているんでしょ……
優しいわねサンザ……
私はかつて

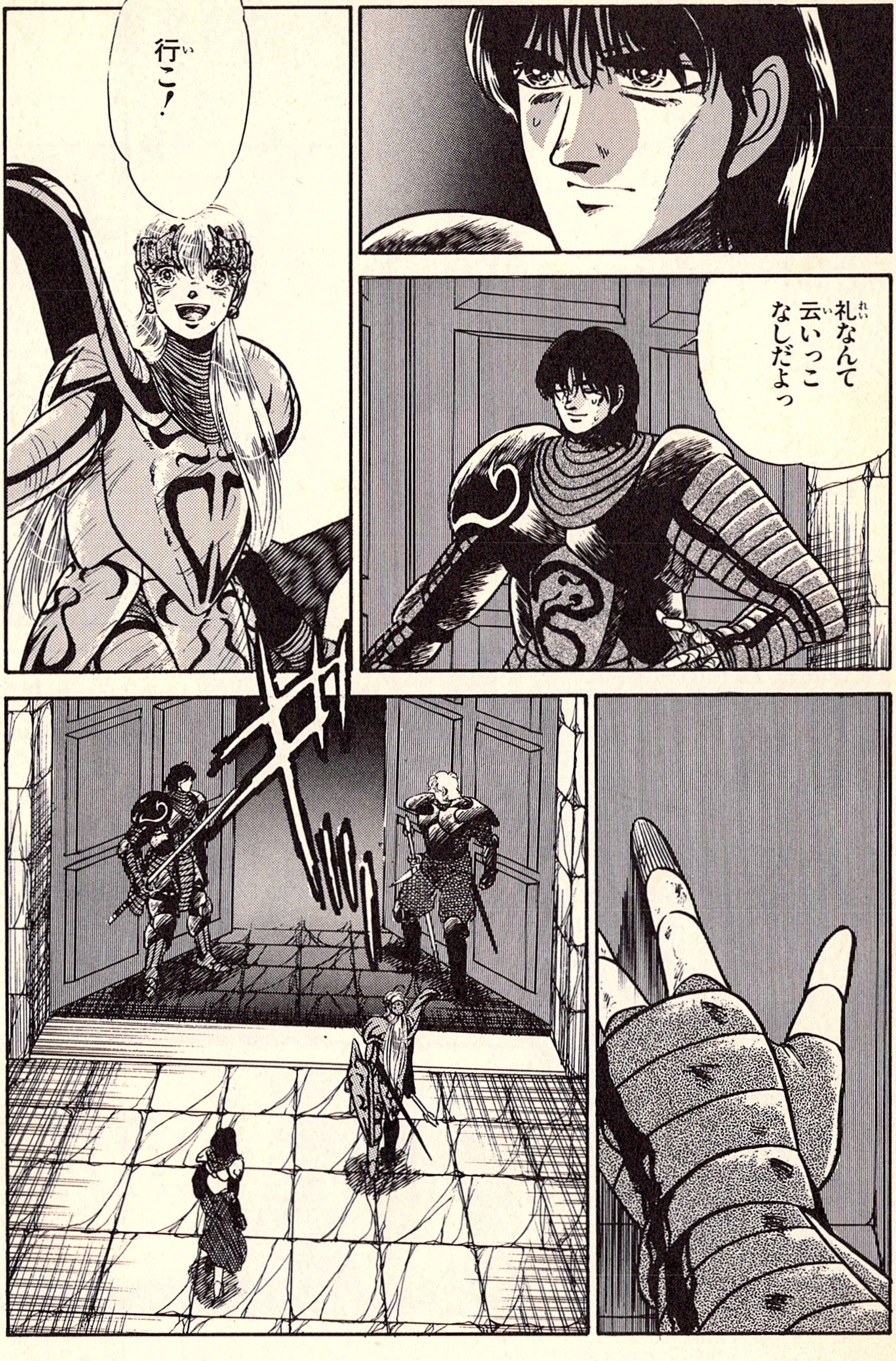

「牙の教徒」の一人――
それもギルの高弟だったわ
神に選ばれし者による完全なる統治――
ギルもあの一冊の本を手に入れるまでは
理想のもとに活動していたし――
私もギルを信じて行動を共にしていたわ
一冊の本？


そう――その本を手に入れてギルは変容したわ
「教会」も一枚岩ではないって云うことか……
そうね ギルの一派は本部から破門され
自分の許で修業していた僧侶たちを私兵とし――
ギルの行為に疑念を抱いた私は「教会」を棄てたわ
以来ギルの一派からは背教者として
本部からは異端者の一味として命を狙われる毎日――
そんな時あの竜に
ギルの築いたこの迷宮に呼び寄せられた


これが
偶然と
云える
かしら
ゼーッ
ゼーッ
行き止まり
みたい…
よ……
ゼーッ
ところで
サンザ
疲れた—
どうして
シェーラさんの
過去知って
いたんだい?
吐かせて
大体は
な—
ゼーッ
あのな
オレは
忍者だぞ
以前この階で
敵の一人
捕えて
ゼーッ

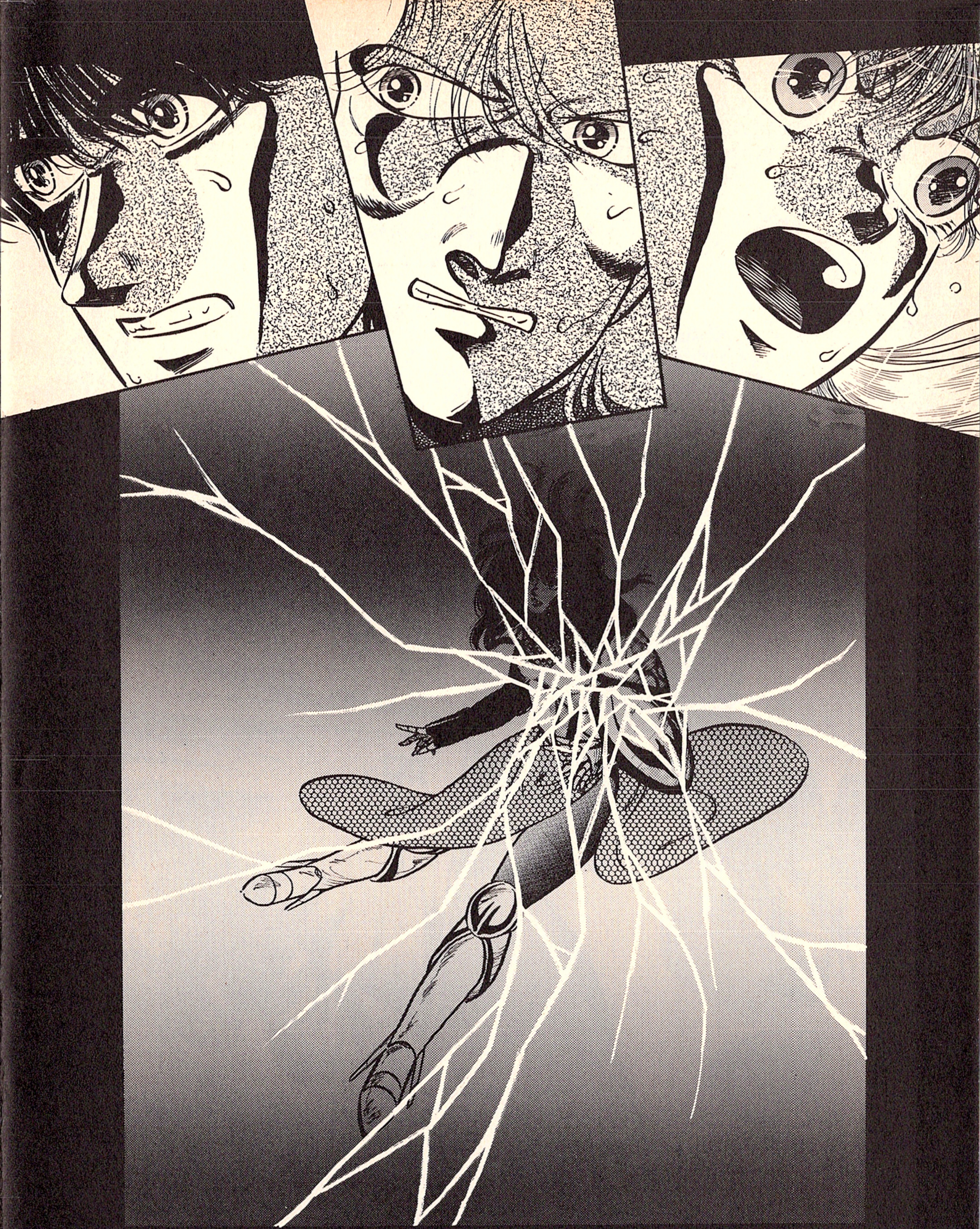

なる——ほど——ね
これが——この階——最後の——部屋ね
ごめんなさい つき合わせて
構わないさ——
え?


旅は道連れ
目標も似たもの——
理由は違ってもね
遅かれ早かれギルとは一戦交えるんだしさ——


礼なんて云いっこなしだよっ
行こ！


バタン
暗いな
怪しいわね
「恒光」でも唱える?
うーん
よそう
その分治療呪文を唱える数が減るからな
同じレベルの治療呪文って云ったら「治痺」よ
まあいつまた麻痺させられるかもしれないし
もっとも姫将軍とシェーラが麻痺したらおしまいだけどね


背教者シェーラ!!
死ね!
呪殺!



次号Vol.1　12月15日発売につづく!!　　**TO BE CONTINUED**

風よ。龍に届いているか

第5回



善なる者たちが迷宮へと向かう。
神秘の宝珠を手にし、
冒険に終止符を打つために——
だが、不吉な翳が過る。
嘆きの精の予兆は、彼らの破滅を暗示するのか——。

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第五章〕出立

三人のうち、二人は人間族だった。
ともに長身だが、片方は特に大きい。優に二メートルを越える肉体を厚い筋肉の束が包み込み、その重量は俺の倍、百四十キロはあろうかという巨漢だ。
そのおかげで、並んでいるもう一人が小柄に見える。
こちらは、やけに線の細い優男だ。整った目鼻立ちと、肩まで垂らした長い金髪のせいで、ランプのか弱い光のもとでは女と見紛うばかりだ。
しかしそれでも、身長は一・八メートル以上ある。この長軀の男が華奢な女に見えるのは、やはり傍らの男が余りにも大き過ぎるからだろう。
残る一人は、ドワーフ族だった。
人間の二人に比べて、その背丈は極端に低い。一メートル半にも満たないだろう。
しかし、ノームやホビットのような小人族といった印象は皆無だ。
その理由は、この種族特有の太い骨格と、それに比例した肉のぶ厚さにある。腕や脚の太さが、人間のそれとは比較にならないほどなのだ。
肉の総量で、人間族としてもかなり体格の良い優男を軽く上回っている。今ここにいる者の中で、人間の巨漢に次ぐ体軀を誇っているのはこのドワーフだった。
これで馬車に運ばれてきた冒険者が全員出揃ったようだ。
「フレイ、早く支度しろ。すぐに出発するぞ」
優男が親指で荷台を指した。そのゼスチャーで、肘から先を包むミスリル製の籠手がかちゃりと軽い音を立てる。
「あ、うん。ちょっと待った」
ホビットは慌てて駆けていき、荷台に飛び込んだ。どうやらフレイは俺との手合わせの際に少しでも身を軽くするためにか、革鎧や籠手を残したままで走行中の馬車から飛び降りたらしい。
それを目で追う俺と優男の視線がまともにぶつかった。
大理石の彫像のように端整な顔が、何の表情も浮かべずに俺を見ている。ただ、若干首を後ろに反らしているため、人を見下した態度に見えなくもない。
もっとも実際には俺のほうが十センチばかり背が高く、もしかしたら見上げているのかも知れないが。
俺はというと、微笑みを浮かべてその視線を受け止めていた。

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍'ル ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。
主人公ジヴラシアは独り迷宮の怪物相手に実戦経験を積み、満たされぬ思いを抱きながらリルガミンの街へ帰還しようとしていた。その帰途、夕暮れの荒野を疾走する馬車を目にする。それは迷宮の探索に向かう冒険者の一部隊であった——。

主な登場人物

・ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の"俺"。
・ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
・マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
・フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
・ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
・アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
・エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
・'ル ケブレス……迷宮を支配する龍。"平衡の守護者"。

しかし向こうに言わせるなら、それは悪意のある薄ら嗤いに見えたかも知れない。

俺にしても、友好的な笑みを送っているつもりはさらさらない。

何故なら、この男が俺を嫌悪していることがはっきりと判っているからだ。

奴の名はマイノスという。

現在レベル12のロード。当然ながら属性は善だ。

善の性格を持つ者と、属性が悪である俺の仲が良い訳もないが、それでも諍いを起こさずに折り合っていくのは不可能ではない。アルタリウスやエレインの態度はそうしたものであり、俺もなるべくならつまらない争いを避けるよう心懸けているつもりだ。

だが、同じ悪でも反りの合わない者がいるように、善と悪の間には運命的に相性が悪いということがある。

言動、態度その他の一挙手一投足がことごとく神経を逆撫でし、顔を合わせただけで思わず敵対心を駆り立てられるような相手。そこまで合わない奴は探したってそうそういるものじゃあないが、いざ見つかるとこれほど腹に据えかねる存在もない。

マイノスは俺にとって、まさにそういう奴だった。

さらに悪いことには、マイノスにとっても俺がそういう存在なのだ。互いに認めあう犬猿の仲だけに、無視しあって衝突を避けることとすらしない。

俺とこいつは、この世界の善悪の対立を代表するような間柄だった。

と、マイノスが細い眉を吊り上げた。

俺が唇の端に浮かべている嗤いに、あからさまな侮蔑の色を見てとったのだろう。

「へっ」

さらに俺は奴に聞こえるように短く呟き、挑発的に目を細めた。自分でもよせば良いのにと思うのだが、こいつの高慢ちきな顔を見ていると、どうしてもその鼻をへし折ってやりたい衝動に駆られるのだ。

マイノスの白面が、微かに紅潮した。そこに怒りの表情が浮かぶ。

俺と奴の間に、間に、軽い緊張が疾った。

交わす視線に、不可視の火花が弾ける。

その線上に、無造作に巨大な影が割り込んできた。

「やめとけよ」

どこかのんびりとした、太い声が響いた。マイノスとの間を遮った影――巨漢の発したものだ。

こうして目の前に立たれると、改めてこの男のでかさを実感する。

腕。

胸。

腿。

肩。

首。

肉体を構成する要素の全てが桁外れに巨きく、太く逞しい。

その軀を包んでいる鋼の鎧も、そして腰に吊した段平までもが恐ろしく大きい。この男のサイズに合わせて造り直された特注品なのだ。

ガッシュ。

それが巨漢の名前だった。

職業は戦士。マスターレベルをすでに凌駕し、レベル15にも達する屈強の闘士だ。

このレベルは伊達ではない。

マスターレベルともなると、その強さ故に実戦で感じる恐怖と緊張はかなり和らいでしまう。レベル1の頃に比べれば、それはもはや天と地ほどの差となる。

緊張感が減じるということは、成長にはより多くの経験が必要となるということだ。実戦という修羅場も、己れの技量が高いほど楽になる道理だ。

そのため、マスター以降のレベルに到達するには、並大抵ではない数の実戦を積み重ねなければならない。戦士というクラスは盗賊同様に比較的少ない経験でレベルアップしたと認められるが、マスターからさらに2レベル上にいる戦士などざらにはいない。

常人離れした巨体から生み出されるパワーと、そのレベルの示す豊富な実戦経験を想像すれば、この戦士の実力がどれほどのものか容易に推し量ることができる。まして実際にガッシュが剣を振るうさまを一度でも見た者なら、こいつを敵に回そうとは絶対に思わないだろう。

ガッシュは初めにマイノスを見、それからゆっくりと俺を振り返った。体格に相応しい、がっしりとした好い貌だ。

彫りが深く、顎が太い。濃い眉の下から覗くグレーの瞳はどこかしら幼さを残しており、それが不思議なほどこの男に似合っている。

「最後になるかも知れないんだ。仲良くできないのかい」

そう言って、ガッシュは悪戯小僧のような笑みを浮かべた。「最後ぐらい止めないで、とことんやらせてみたい気もするな」

「冗談ではないぞ。これから出発って時に」

ドワーフが口を挟んだ。「仲間が欠けたら、それこそことだ。ここで気を抜いて返り討ちに遭っては目も当てられん」

「ボルフォフ。私が負けるとでも言いたいのか」

ガッシュの陰になったマイノスが気色ばんだ声を上げた。なるほど、この場合仲間が欠けるということは、マイノスが俺に負けるといってるようなものだ。当然だが、良いことを言う。

「いや、そうは言わん。しかし本物のマスターニンジャ相手に過剰な自信は禁物だぞ。良くて瀕死の重傷は覚悟しないとな」

ドワーフのボルフォフは、左右に分けて三ッ編みにした長い髭を引っ張りながら答えた。肩に掛けた巨大な戦斧が鈍い光を放つ。

この男もマスターレベルに達した一流の戦士だ。低い重心から繰り出される斧の一撃は、人間族には真似のできない凄まじい威力を持っている。

「ちょいと違うな、ボルフォフ。手加減してやって瀕死だ。本気でやったらあいつはカント寺院行きだぜ」

「ジヴ、お前もだ」

マイノスが俺の挑発にのる前に、ボルフォフが俺をたしなめた。

「マイノスは強いぞ。自分の言葉を思い出せ。驕ることなかれ、とな」

それは、俺が先刻フレイに言った言葉だった。

「ちっ。聞いてたのか」

俺はばつが悪くなり、腕を頭の後ろに組んだ。「人が悪いな」

ほっほっと笑い、ボルフォフはマイノスに目を向けた。

「先に行こう。お前とジヴが近くにいるとろくなことにならん」

「ふん」

マイノスは不快そうに鼻を鳴らしたが、そのまま岩山に向けて歩きだした。その後を、今のやりとりの間に携帯ランプに火を灯したアルタリウスとエレインが無言で追う。

それを見送り、ボルフォフも歩き始めた。

「迷宮の入り口で待っている。フレイと一緒にな」

そうガッシュに言い、そして一度立ち止まって俺を振り向く。「帰ってくる時は、宝珠も一緒だと良いがな」

「そいつが肴なら酒が旨いだろうな。その時は秘蔵のやつを奢るぜ」

ボルフォフは髭の下から丈夫そうな歯を見せて、にっと笑った。

「楽しみだ。ますます宝珠が恋しくなった」

「油断するな」

「うむ。先刻のフレイへの忠告、我々全てのものとして受け取ろう」

最後に片手を大きく上げ、ボルフォフは再び迷宮に向けて長いスロープを上り始めた。

「いよいよ、だな」

闇に溶け込んでいくその姿を見つめながら、俺は巨漢の戦士に話しかけた。

「ああ」

ガッシュは腕組みをし、遠ざかるボルフォフたちの遥か上方を睨んでいる。

その先には、暗い夜空にぼんやりと浮かび上がる、シルエットとなった岩山の山頂があった。

こう見ると、それはあたかも巨大な天秤の支柱のようだ。

鱗ある龍の護る、善悪のバランスを量る天秤。ルケブレスへの皮肉を


Masaki

込めて、俺たち冒険者はこの山を〝梯子山〟の名で呼んでいる。
「俺たちはとうとう宝珠に手が届くところまで来た訳だ。この探索の噂を聞いてリルガミンにやって来て、初めてスケイルに入った一年前は、どうにも無理な話だと思ったもんだったが」
「一年か――」
ガッシュが感慨深げに呟いた。「長いようで短いな」
「短いさ。そして宝珠を手に入れちまえば、この探索もおしまいだ」
「厭か」
一瞬何を言われたのか判らず、俺は山を見上げたままのガッシュの横顔を見つめていた。
そしてためていた息を吐き、空を見た。
ガッシュの言葉は、探索が終局に近づいたこの数日、俺が抱き続けてきた思いを見事に表していた。
そうなのだ。
俺は天変地異で世界が滅亡すること以上に、命を賭けた冒険が終わってしまうのを恐れている。
「お前にゃ隠せないか。いや、そうじゃないな。言われるまで俺自信、この思いが一体何なのかはっきりしなかった」
少し風が出てきた。顔をなぶる冷たい風が、真情を吐露する高揚した気分に心地よい。俺は続けた。
「この先どうしたらいいかって、思っちまうのさ。ぎりぎりの、命のやりとりがなくなったら、何が残るのかってな」
「平穏な日々さ」
ガッシュが俺に向き直った。「みんなそれを求めてる。それが一番の幸せだよ」
「お前は、そう思うか」
「さあなあ」
困ったようにガッシュは笑った。「俺はリルガミンや、この世界が好きだ。それが滅びちまうのは厭だな」
俺の問いへの答としてはおかしかったが、それでいてやけに相応しかった。
「そうだな」
俺がそう応えた時、ようやくフレイが準備を終えて戻ってきた。堅い革鎧を重そうに着こみ、ミスリルの籠手をはめた姿はいかにも窮屈そうだ。
「あれ、もう行っちゃったの」
今はもうかなり先を歩いているボルフォフたちのランプの灯りを見つけ、フレイは怒ったように俺とガッシュを見た。
「のろまは駆け足で来いってさ。さあ、追いつこうぜ」
言うなりガッシュは走りだした。
その巨体からは想像もつかない、しなやかで素早い動きだ。重い鋼の鎧を着けているとは、到底信じ難い。
「待ってよ！　じゃあね、ジヴ」
慌ててフレイも後を追う。
ランプもなしに走る二人の姿は、あっという間に闇の中に消えた。
見送る俺に、暗闇の向こうからガッシュの声がした。
「……見つけりゃあいい」
走りながらそう叫んだようだったが、風にかき消されたのか全て聞き取ることはできなかった。
にわかに風の強くなった荒野に立ち、しばらくの間俺は遠ざかっていく小さな灯を見つめていた。
ガッシュは何と言ったのか。
何かを探せと言うのか、それとも別の意味か。気にはなったが、もはや確かめる術はない。
「……さん、ジヴラシアさん！」
背後から呼びかけられていると、俺は長いこと気づかなかったらしい。
振り向くと、馬車の上から御者の衛士が叫んでいた。
俺がようやく気づいたので、若い衛士はほっとした表情を浮かべた。
「乗っていきませんか？　明日また迎えに来ることになってるんで、街まで戻るんですよ」

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

本来はパーティが戻るまで待機し、いざと言う時には冒険者の遭難を連絡する役割を持つ送迎馬車だが、日没後はこの荒野にも魔物が徘徊することがあるため、さすがに夜間はリルガミン市に帰るらしい。まあ、いずれにせよガッシュたちが明日の夜明けより早く迷宮から出てくることはないだろうから、待っていても無駄というものだ。

一人で迷宮に来る時は、俺は滅多に馬車を使わない。

馬車はあと何台か用意されているため、俺が一台出させたところで他の冒険者の出発を滞らせる心配はないのだが、どうにも乗り心地が悪過ぎるのだ。

街からスケイルまでの十キロメートルを、自分の脚で走る。忍者の基礎修業で日々走っていた距離よりも短く、これはいい準備体操代わりになる。

加えて、二十分ほどで走破できるから馬車よりも早い。手ぶらの俺がわざわざ尻の痛くなる馬車に乗ることもない訳だ。

だが、今は何故か走りたくなかった。

「ああ、頼む。お手柔らかにな」

俺は荷台に乗り込んだ。連中が残していった毛布に、ごろりと横になる。

馬首を巡らせ、馬車はゆっくりと動きだした。

風はかなり激しくなっていた。荒野を渡る風がひょうひょうと不気味な音を立て始める。

時には高く、そして低く。

それは獣の吠え声にも、人の泣き声のようにも聴こえる。

「気味の悪い風ですね」

吹きつける突風に肩をすくめて青年衛士が言った。「ちょっと前まであんなに穏やかだったのに」

「異変は続いてるんだ。これが地割れや雷じゃないだけましさ」

俺は寝転んだまま応えた。

「脅かさないで下さいよ。地割れなんかができてたら――」

言葉が途切れた。衛士が息を呑むのが判る。

急に手綱を引かれ、四頭の馬が一斉にいなないた。そのまま竿立ちになり、馬車は大きく揺れる。

俺は跳ね起きた。

「どうした！」

衛士は正面を凝視していた。視線を追った俺も、それを見た。

緑の衣をまとい、青白い肌をした美しい女が、十メートルほど先に立っていた。

長い黒髪を振り乱しながら、女は泣き叫んでいる。風の音の中に、その声はひときわ高い旋律を刻んでいた。

見開かれた眼が、赤かった。だが、それは泣きはらしたのではない。瞳が、紅く妖しい光を放っているのだ。

嘆きの精だった。

人の死を告げる精霊が、馬車の行く手を妨げるように嘆き続けているのだ。

凍りついた俺に、嘆きの精は訴えるような視線を投げかけた。そして緩慢な動作で右手を上げ、指差した。

俺の後方を。

振り返った俺と衛士の目に、荷台の出口を通して岩山の黒い影が映った。

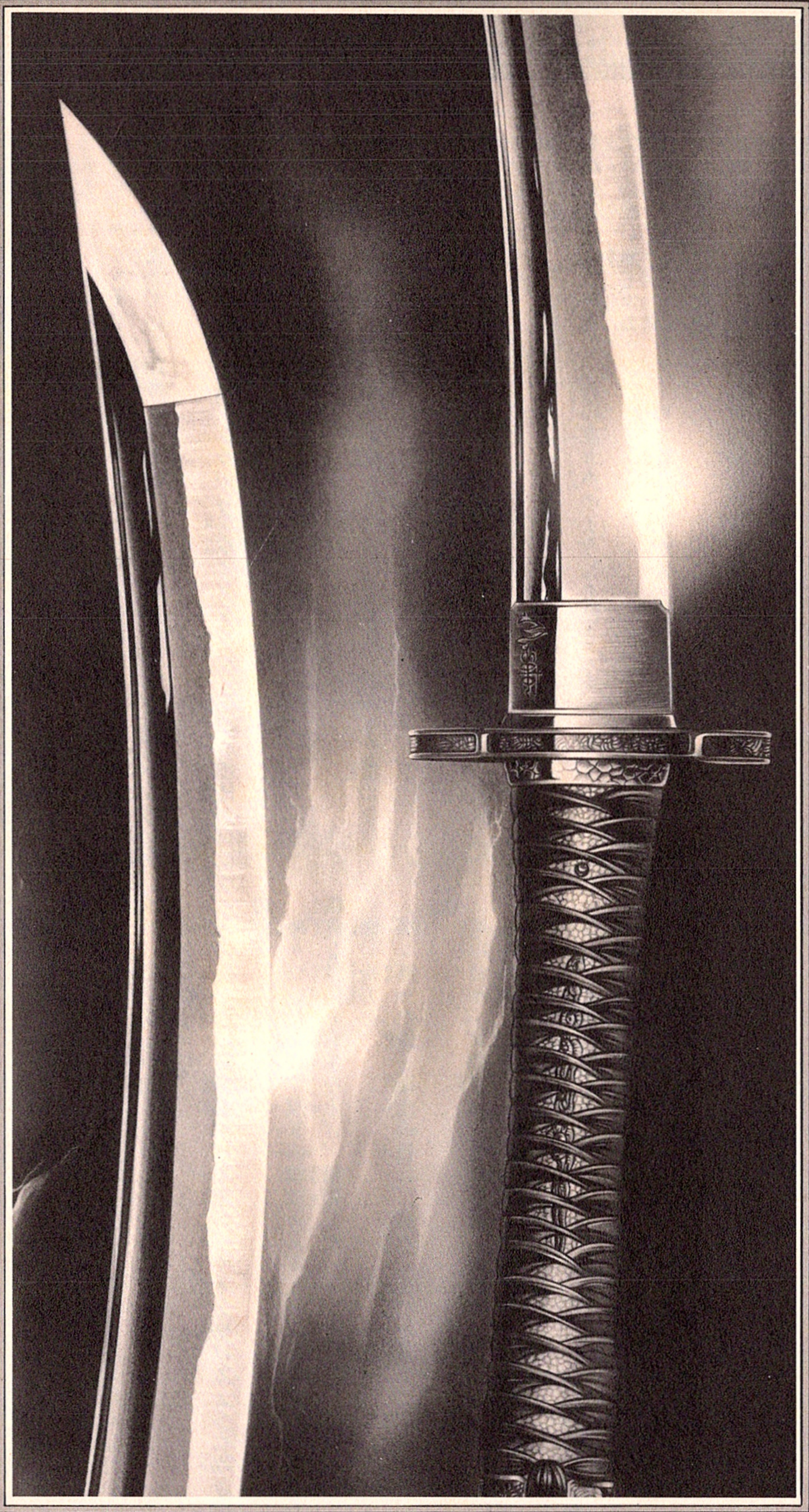
連中のランプの光は、もはやそこにはなかった。

再び視線を戻した時、嘆きの精の姿は消えていた。吹き荒ぶ風の叫びだけが、その名残を残している。

俺は、心臓に氷の針を突き立てられているような気がした。

凶兆をあざ笑うかの如くに、風がびょうと駆け抜けた。

（次号につづく）



●コミック版
ウィザードリィ外伝
——ギルの迷宮
作／石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ
(P84)からお読み下さい。